

# ふるさと奥尻通信

平成30年2月28日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭言

明治期、奥尻の東海岸を「内部」、西海岸を「外部」と呼んでいたことには驚かされる。今では西海岸のことを「裏」と呼ぶことがある。東海岸は「表」ということだろう。

## 特集 青江理事官の奥尻巡回紀行 その②

前号に引き続き青江の紀行文を紹介します。一行は島の中心部から東海岸を南下して南端の青苗地区を目指します。

赤石川から武士川の間は海辺が危険なので山道を通そうとした。※

この辺で折戸甚太郎が漁場を2統開いている。熊石の人で今年からきた。太田戸長が言うには「樹木は官林だが、海岸から300間、沢なら200間離れた場所からではないと、伐採を許さない。濫伐しないよう村民を諭している」とのこと(1)。

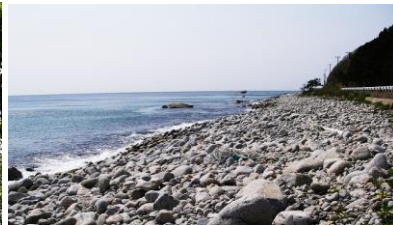
薬師村長浜を過ぎると、熊石村出身の新保権六という者が今年から漁場を開いている。熊石の家は売却しようとしている。

戸長が言うに、「釣懸村で製塩を試みた場所があり、今はそこを塩釜と呼んでいる(2)。郵便船は熊石村関内より5便、久遠より1便あり、久遠は不便で熊石が便利である」。

また、「掛岩(かかり石)と呼ぶ岩があり、そこを掛岩岬と言う。次に弥右衛門岬があり、船頭の弥右衛門以下17人が漂流し、凍死したことにちなんでの命名。西海岸で見つかる白骨も、この弥右衛門の類(遭難者)」だという。



海岸線から少し入ったブナ林



長浜の海岸線 花崗岩の浜



※赤石岬の難所(右が旧道) 現在は切通の道路



明治末期の奥尻港周辺 岸壁は未整備

### ◆用語解説と註◆

(1)	海岸部に希少なブナ林が残った要因
(2)	現在の奥尻地区中心部
(3)	土器や石器と思われる
(4)	ウィルタ。元来、旧樺太中部以北の民
(5)	アイヌ。太田戸長は八戸出身の為、郷里の考古学的な話題を出したようだ
(6)	和人では田口家が最初に移住した
(7)	この言い伝えは根強く残るが詳細不明
(8)	奥尻の山中では、珪化木がみられる
(9)	青苗岬のこと
(10)	明治初期に移住してきた古い家

戸長の話として、「南部宮古より八戸辺古代の陶器雷斧(3)等出づ。蝦夷楯と称し5、6尺の堀を作る所多し。往時本道にはヲロツコ(4)人居住し今のアイノ(5)は南部地方に居住せしものならん」と。

他に、昨年6月、函館寄留の徳田輿三郎が硫黄山実検に訪れ、球島川から大岩生川に下る間で露頭を発見したという。

薬師村本村を過ぎると、7、8戸ある。薬師堂があったので、この命名がある。昔、島内合計で10戸ほどの時代に、ここに3戸あり、(和人が住み始めて)島内でもっとも古い場所の一つ(6)。ここから青苗岬まで海岸に樹木が無い。

大ワンゴ(場所、意味不明)を過ぎて丸山善七宅がある。今年、江差から移住。140、150石を収穫。

初松前(はまづまえ)を過ぎる。武田信広が住んだ所という。城跡、東西30間、南北80間の平坦な5400坪ばかり(7)。続いて赤川に至る。この川の上流に貝と木の化石が出る(8)。

午後3時23分、青苗川の傍らより上陸。山から眺めると開墾地がある。午後4時、徒歩で青苗村へ達する。丘に登ると原野で、南端にさらに低くつづき突き出している(9)。平磯がつづく。海上1里ばかりのところ室津島と呼ぶ岩礁がある。

午後4時30分、菊地竹次郎宅に到着(10)。さらに西海岸の神威脇へ向かおうとするが、風が悪く止めて青苗に投宿。この日の行程11里。ここで禁酒を説く、沢口富士吉の話詳しく聞く。

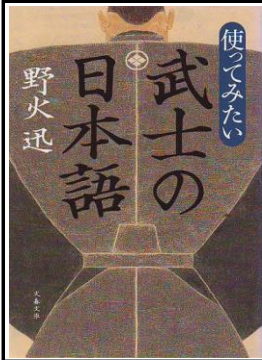
6月6日、午前4時11分青苗村を発し、西海岸へ向かおうとするも、波が穏やかではないので船便なし。釣懸村に戻ると午前6時30分。川崎船2艘にて出発。正午に三艘潤に到着。林頭三郡長ら出迎え。久遠に帰港した。



西海岸の奇岩群(昭和40年頃)



青苗中学校グラウンド裏手の山を発掘している様子です。平成5年の地震後の集団移転先として、通称「かべ山」と呼ばれた段丘が選ばれ、団地が造成されました。開発工事の前に遺跡の発掘調査が必要となり、大規模な発掘が行われ、縄文時代の土器や石器が出土しました。手前に円形の竪穴住居跡のような窪みがあり、柱穴と考えられる直径20~30cmほどの穴が多数空いています。三脚が二つ立っていますが、手前のは高さや位置を測るトランシット、左奥のは水平の高さを測るレベルです。右手には発掘作業をするおじさんとおばさん。移植シャベルを使って掘り進めています。



学芸員オスマメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

使ってみよう 武士の日本語 野火 迅

時代小説好きは直ぐわかる? 「どれ、一つまいろう」とくれば、今日は金曜日、一杯やるかの意。「御墨付」とは主君の承諾書。主君の署名が花押付きで黒々と墨で書かれていたから。「出来物」(できぶつ)は立派な人物。驚いた時は「これははしたり」。失敗した時は「ひらに」(なにとぞ)ご容赦を。「喋々」とはしきりに長々としゃべること。

月刊 奥尻のつり 2月号

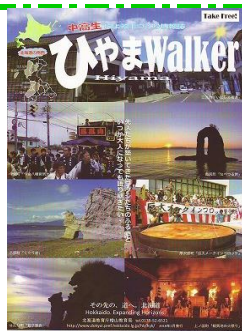
恒例のサクラマス釣りですが、1月中に多少釣果があつて以降、陸からの吉報は途絶えたままです。一方、沖の船釣りはますます本数が揚がっているようで、ようやくライセンス購入の甲斐があったというものでしょう。1月末でスルメイカ漁が終了。函館市場での取扱量は、生鮮が1,622トンと過去最低の昨年度より8%上回ったものの、冷凍と合わせると、ここ10年では過去最低の取扱量だったとのこと。夏場に函館方面に漁場が形成されたためにやや向上したようですが、その頃奥尻近海には出現しませんでした。他方、対岸の松前方面ではヤリイカ漁がやや好漁という報道もあり、奥尻方面への回遊も期待したいところです。雪の多い今冬、春先に海に流れ込む雨水は多くなることでしょう。

昭和奥尻生活詩 新谷清二の鳥賊つけ1ヶ月 第31回

釣石尋常小学校高等科二年生 文集「鳥の子」第八号より  
 と他のにも上釣にるとはかしへてただ入と  
 油のでな止にか強。、どらた歳見釣。とれば雨昼  
 の三機るま筵なく。だ雨、年。たり今思た起降後  
 臭人械。なをく降そんが、雨頭。ら場日。き降  
 いも場ずかかなつし、首つはの釣百にはたそたっ日誌  
 が入のんぶつてて服筋き降隣い十来久らし。て誌  
 鼻っ中、たった来寒もを出っのた二て遠烏て鳥きをつ  
 にたに寒。た。るく汚流しておぞも錨に賊寝賊たつ  
 来。入。く筵が俺。なれたい父。深を向付たをどけ  
 つた入っなま、達九るて。たが。か下け。集。て  
 づ。るた。で雨は時。へ背風が叫番。つすての時め呼寝  
 く。と。てずは合頃雨濡中が、ん先た。出仕間てばた  
 ブ俺きぶ少羽に段れに吹鳥だに。調発度も倉れ。  
 ンのた、しのは々 入く賊時下 べし 寝にて

ま記たて準ますん性団し性  
 し念。、備し。が部体た三二  
 た撮最今のたこ交、連。団月  
 。影後回複がれ流漁絡こ体四  
 しのが雑、ます協協れ交流、  
 、挨最さ会でる女議は、会  
 大撈後な員長イ性会、島  
 団のとどのくべ部、島  
 円後なも高続ンの商内行恒  
 を、りあ齡いとみ工女のわ  
 迎皆まつ化でな会女れ  
 えでし やき さ女性ま

三団体交流会有終の美



今年の表紙は?

さのなせい俗新町ま化がた関ま  
 いでどんま資進内と、町。係ウ昨  
 。、でタす料のかめ飲の檜各オ年  
 手無。館レらた食観山町。に  
 に料、町なスは小店光管村力引  
 取配フ役どト、冊な名内に。し  
 つ布エ場がラ老子ど所の配。続  
 てしり、紹ン舗でをや高布が  
 みて。海介、のす取歴校さ完、  
 てい乗洋さ歴食。材史生れ成  
 くまり研れ史堂奥し文がまし  
 だす場修て民、尻、わし、や

今年も出来ました!

て現みみ輪さの嘆者と頃ら  
 落れるるをて不くはい。ば武  
 ちるかか平、運様社う類、士  
 着い。和冬をを会の義一の  
 かる選政ス季嘆言のも語悲  
 なよ手治ポ五くう。正る一  
 いうの活。輪意。後。に。そ  
 場で、顔動ツが味後。に。歌  
 面。に。の。閉。が。者。対。う。歌  
 も。見。如。一。祭。幕。強。は。し。だ。慷  
 て。実。部。典。い。自。憤。慨。の。な  
 い。にと。と。五。身。り。前。の。な

新衣之記録(編集後記)

トデま活研動シリ選でも体域  
 活。し。動。修。し。ま。出。一。が。活。一  
 動。た。案。で。冬。ず。し。さ。会。奥。発。性。月  
 に。開。が。の。場。ん。た。れ。長。に。チ。し。を。九  
 な。催。恒。示。自。の。中。の。今。役。永。一。ま。目。日  
 が。例。さ。己。イ。の。後。環。員。洞。ム。し。指。し  
 と。最。の。れ。研。ベ。環。後。は。な。達。島。た。島  
 の。初。一。さん。境。は。ど。也。お。た。島  
 の。雪。了。ん。ト。美。ど。也。お。た。島  
 と。イ。山。承。な。開。化。観。が。さ。こ。そ。青  
 べ。感。さ。ど。催。活。光。決。ん。し。の。年  
 ン。謝。れ。の。ま。が。一。名。団。地

島おこしの青年団体発足



奥尻かるた